

2008年度前期情報リテラシー実践Ⅰ授業評価報告

基礎教育センター・教授
永井 正洋

はじめに

本稿では、2008年度前期末に行った、情報リテラシー実践Ⅰに関する授業評価アンケート（SE、TE）の結果を報告する。

昨年度から回答方法として、Network-learningシステムを用いてアンケートを行っているが、昨年度と比べると、SEでのシステム利用のクラスが19クラスから35と増加した。また、TEについても同じ数で増えている。内容に関しては、アンケートの質問項目のうち、個別質問項目に授業の難易度の項目が加えられ、e-mailとWeb検索に関する学習の到達度の項目が削除された（問9）。

この授業評価アンケートに先立ち、本年度で3年目となる情報リテラシーに関して問うたレディネス調査を、4月に実施したが、主観評価からは、多くの項目で伸長が認められており、学生の情報リテラシーを身に付けているという意識は、若干であるが、高まってきたと考えられる。しかし、多くの項目は全学生中で肯定的意識が50%を超えておらず、その意味では、あまり身に付いていないとの意思表示であると考えられる。また、客観テストからは、本学は他11大学の平均と比べ、有意に低い得点となっており、基本的な情報リテラシーを欠く状態にあることが分かった。

ここで、主に基礎・基本的な情報活用能力の育成をねらう情報リテラシー実践Ⅰは、以下の様な学習内容から成り立っている。

『情報倫理、コンピュータやネットワークの仕組み、e-mail、Web検索、文書編集、表計算、プレゼンテーション』

したがって、前述のレディネス調査の結果に見られる学生の実態には、適当な内容であることが推察されるが、授業後に実際、彼らがどのように授業を評価したかということを検証したい。よって、以下を本稿の目的とする。

目的

情報リテラシー実践Ⅰ授業評価アンケートから、学生や教師の意欲や情報リテラシー、また授業構成能力などの実態を明らかにすると共に、学生の満足度の規定要因分析を行う。

方法

以下の様に授業評価アンケートを実施した。

実施時期：2008年7月7日～7月22日

学生による授業評価（SE）：

対象：首都大学東京 情リテⅠ受講者

回収数/人数：1494人/1751人（85.3%）

方法：BlackBoard（35クラス）

マークシート（4クラス）

教員による授業評価（TE）：

対象：首都大学東京 情リテⅠ担当教員

回収数/人数：39クラス/39クラス（100%）

方法：BlackBoard（35クラス）

マークシート（4クラス）

結果と考察

まず、図1を見ると、「授業に意欲的・積極的に取り組んだか」という「問1」に対して、昨年と同様に約7割の学生が肯定的に答えている（5. 強くそう思う+4. そう思う）。しかしながら、「問5」の「授業外」での学習となると、0時間と1時間程度勉強する学生を合わせて約77%にも上り、あまり学習していないことが分かる。しかし、この値は昨年度の85%と比べると、若干の改善がみられている。

次に、「問10」、「問11」の文書編集と表計算に関しては、それぞれ、62.8%、61.3%の学生が身に付いたと答えており、レディネス調査では、関連項目の多くで5割を超えていなかったことを考えると、授業の効果が現れているといえよう。しかしながら、昨年度の同じ項目の割合は、68.2%と63.6%であったことを考えると、若干落ちているので、今後、注意して見ていきたい。

「問7」の「シラバスに目標として掲げられている知識や能力を獲得できた」に関しては、50.8%が肯定的に答えるに止まっている。これについては、前述の文書編集や表計算の値と比べると低いが、昨年度の46.6%と比べ少し改善しており、それらアプリケーションソフト以外についての学習が評価された可能性がある。また、「問6」の「成績評価方法について十分な説明があったか」については、肯定的に回答した学生が、50.8%であった。昨年度の割合は35.2%であったが、情報教育検討部会により、「情報リテラシー実践の成績評価の指針」が示され

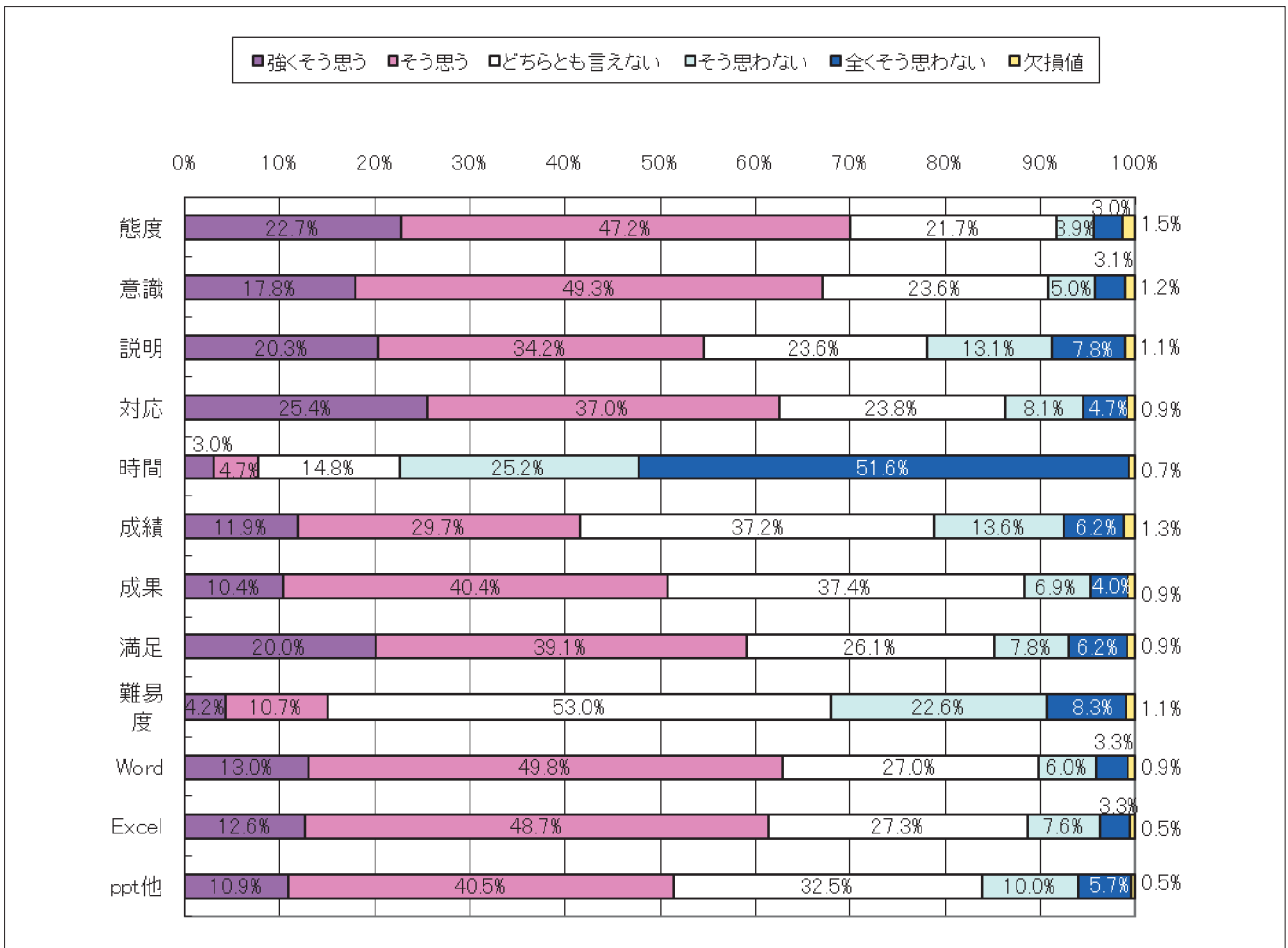


図1 SE回答の度数分布

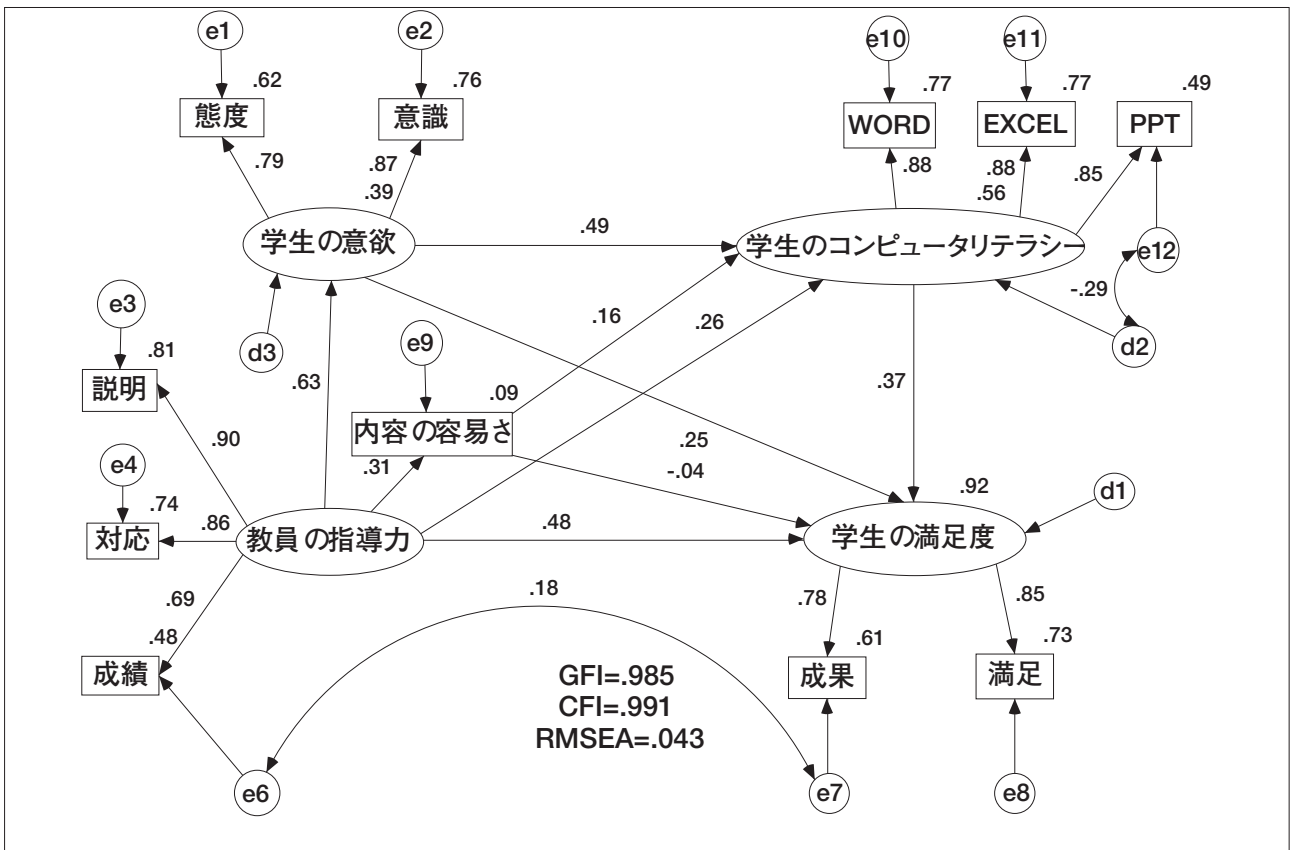


図2 満足度の規定要因の分析

たのが昨年度末であったことを考慮すると、そのことが学習評価への関心に影響し改善したのではないかと考えられる。

最後に、本年度は、新しい観測変数として「難易度」が設定されたが、これは学生に、問9「授業全体を通して、授業内容の難易度はどうでしたか。」と聞いている項目である。図1からは53%と大半の学生が「適切だっ

	強くそ う思う	そう 思う	どちらとも 言えない	そう 思わない	全くそう 思わない
態度 (p=.188)					
クラス	0	32	6	0	0
教員	1	27	11	2	0
意識 (p=.002)					
クラス	0	30	8	0	0
教員	11	26	4	0	0
説明 (p=.010)					
クラス	6	13	16	3	0
教員	7	27	7	0	0
対応 (p=.056)					
クラス	4	20	14	0	0
教員	11	23	6	1	0
時間 (p=.343)					
クラス	0	0	3	27	8
教員	0	3	2	26	10
成績 (p=.030)					
クラス	2	12	21	3	0
教員	11	15	12	3	0
成果 (p=.000)					
クラス	0	18	20	0	0
教員	5	30	6	0	0
満足 (p=.930)					
クラス	1	22	14	1	0
教員	2	25	13	2	0
難易度 (p=.016)					
クラス	0	2	32	4	0
教員	0	12	24	5	0
Word (p=.045)					
クラス	0	26	12	0	0
教員	5	28	6	0	1
Excel (p=.006)					
クラス	0	25	13	0	0
教員	8	27	5	0	1
ppt他 (p=.007)					
クラス	0	18	20	0	0
教員	4	28	8	1	0

表1 SEとTEの比較

基礎ゼミ	実践英語	情リテ	都市プロ	全学共通	平均
3.79	3.35	3.59	3.59	3.23	3.51

表2 他科目との比較

た」と答えていることが分かる。また、容易(4. 易しかった+5. 易しすぎた)だという意識の学生が14.9%であるのに対して、難しい(1. 難しすぎた+2. 難しかった)と回答した学生が、30.9%であり、難しいと考えている学生の方が倍多いことも分かる。

w 続く表1では、学生による授業評価と教員による授業評価の比較を行っている。これによると、12の質問項目中、8問で両者に有意な差異があることが明らかになった。具体的には、例年と同様に教員の回答結果の方が高い傾向にあり、授業に関して肯定的に捉えていることが分かる。

最後に、図2は、満足度を規定する潜在変数を明らかにするために、共分散構造分析を行ったところである。適合度は、GFI=.985 CFI=.991 RMSEA=.043であり、観測変数とモデルの分散共分散行列とがよく一致していることが分かる。これによると、「学生の満足度」は、影響力の強い順に、「教員の指導力」、「学生のコンピュータリテラシー」、「学生の意欲」という潜在変数から影響を受けていることが分かる。したがって、ここ3年間同様であるが、「満足度」はどちらかかという、学生の主体的な学習よりは、教員の指導力に依存していることが推察される。

次に、新しい観測変数「難易度」(図2中は、「内容の容易さ」と表記)は、学生の満足度にほとんど影響していないことが分かった。よって、例えば授業が容易であるから満足しているというような因果関係は認められない。

最後に昨年と比較をしてみると、「学生の満足度」に因果関係のある潜在変数の影響力の強さの順序は同じであるが、「学生のコンピュータリテラシー」に関しては違いがみられる。昨年は「教員の指導力」からの方が「学生の意欲」より影響が強かったが、今年は「学生の意欲」からの影響の方が強くなった。これが、学生の主体性に関する向上によるものであれば、評価できるところである。

全体的として、図2のモデルでの潜在変数間の因果関係で、「学生の満足度」が「教員の指導力」から、より強く影響を受けていることが分かると共に、表2から、他科目の中で情報リテラシー実践Iは、比較的良い評価を得られていることが分かったので、学習内容は例年と同様に比較的、学生に受け入れられていたと推測される。

まとめ

2008年度前期末に実施した情報リテラシー実践Iの授業評価アンケートの結果の分析を行った。結果として、

学生は概ね意欲的に授業に取り組んだが、授業外での学習をあまり行っていないことが明らかになった。授業内容の難易度に関しては、適切だと感じている学生が大半であったが、残りの学生では難しいと考えている学生が多かった。

学生の満足度に対する規定要因分析では、授業の難易度からの影響はほとんどみられなかった。他方、例年と同様、学生の意欲やコンピュータリテラシーからの影響よりも、教員の授業構成力からの影響の方が強くなっていることが分かった。加えて、学生の情報リテラシー実

践 I の満足度は比較的高いことから、学習内容に関して、肯定的に捉えられていることが推察されることを述べた。

注)本文中で、昨年度のデータとの比較をしているところでは、昨年度のデータを以下の文献から参照されたい。

参考文献

永井正洋 『2007年度前期情報リテラシー実践 I 授業評価報告』
(首都大学東京FD委員会クロスロード, No. 5, pp.69-72, 2007)